

琉球大学学術リポジトリ

孝経, 其他諸書物綴

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション : 琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Douchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: 宮良當整 (筆写) , 2021/9/8 16:09 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49022

大正八年己未十月合併

孝經其他諸書物綴

宮良當整

孝經

二十四孝行之錄

鴈之諸書

經典神註

孝女口説

魚水之解

花木養方

力ナリ鳥之説

三味説之由来

以呂波字多
拾玉智恵海

兵士充心懸
雲打水之机

(登川就座作爲とあり
九月十日記す)

以呂波字多の光子
一兵多 (用紙工之机)
一雲打水之机 (用紙於八枚)
あり九月十日記す

孝

二十四孝行之第一

爲之記書

經典

孝女口說

魚水之別

花不卷心

少鳥之愛

三木說

拾遺錄

卷之

第

十

卷

第

孝經

松茂氏
當親

孝經

仲尼問居曾子侍坐子曰參先王有
至德要道以順天下民用和睦上下
無怨汝知之乎
曾子辟席曰參
不敏何足以知之
子曰夫孝德
之本也教之所由生
復坐吾語
汝身體髮膚受之父母不敢毀傷孝
之始也立身行道揚名後世以顯父

母孝之終也夫孝始于事親中于事
君終于立身 愛親者不敢惡于
人敬親者不敢慢于人愛敬盡于事
親而德教加于百姓刑于四海益天
子之孝 在上不驕高而不危制
節謹度滿而不溢高不危所以長守
貴滿而不溢所以長守富富貴不離
其身然後能保其社稷而和其民人

蓋諸侯之孝 非先王之法服不
敢服非先王之法言不敢道非先王
之德行不敢行是故非法不言非道
不行口無擇言身無擇行言滿天下
無口過行滿天下無怨惡三者備矣
然後能守其宗廟益卿大夫之孝也
資于事父以事母而愛同資于
事父以事君而敬同故母取其愛而

君取其敬兼之者父也故以孝事之
則忠以敬事長則順忠順不失以事
其上然後能保其爵祿而守其祭祀
蓋士之孝也 用天之道因地之
利謹身節用以養父母此庶人之孝
也 故自天子以下至于庶人孝
無始終而忌不及者未之有也

右經一章

子曰君子之教以孝也非家至而日
見之也教以孝所以敬天下之為人
父者教以悌所以敬天下之為人兄
者教以臣所以敬天下之為人君者
詩云愷悌君子民之父母非至德其
孰能順民如此其大者乎

右傳之首章釋至德以順天下

子曰教民親愛莫善于孝教民禮順

莫善于悌。後風易然。莫善于樂安。三
治民莫善于禮。禮者敬而已矣。
故敬其父則子悅，敬其兄則弟悅，敬
其君則臣悅。敬一人而千萬人悅，所
敬者寡而悅者衆。此之謂要道。

右傳之二章釋要道

曾子曰：甚哉孝之大也。子曰：夫孝，天
之經，地之義，民之行。天地之經而民

是則之，則天之明，因地之義，以順天
下。是以其教不肅而成，其政不嚴而
治。

右傳之三章蓋釋以順天下

子曰：昔者明王之以孝治天下也，不
敢遺小國之臣，而況于公侯伯子男
乎？故得萬國之歡心，以事其先王。
治國者不敢侮于寡，而況于士

民乎故得百姓之歡心以事其先君
治家者不敢失于臣妾而況于
妻子乎故得人之歡心以事其親
夫然故生則親安之祭則鬼享之
是以天下和乎災言不生禍亂不作
故明王之以孝治天下如此詩云有
覺德行四國頌之

右傳之四章釋民用和睦亦無怨

曾子曰敢問聖人之德其無以加于
孝乎 子曰天地之性人為貴人

之行莫大乎孝

孝莫大乎嚴父

嚴父莫大乎配天則周公其人也

昔者周公郊祀右稷以配天宗祀
文王于明堂以配上帝是以四海之
內各以其職來助祭夫聖人之德又
何以加于孝乎 故親生之跡下

以養父母曰嚴聖人因嚴以敬敬以
親以教愛聖人之教不肅而成其政
不嚴而治其所囚者本也

右傳之五章釋孝德之本

子曰父子之道天生君臣之義也父
母生之續莫大焉君臣臨之厚莫重
焉不愛其親而愛他人者謂之悖德
不敬其親而敬他人者謂之悖禮

右傳之六章釋教之由所生

子曰孝子之事親居則致其敬養則
致其樂病則致其憂喪則致其哀祭
則致其嚴五者備矣然後能享親
享親者居上不驕為下不亂在醜
不爭居上而驕則亡為下而亂則刑
在醜而爭則兵三者不除雖日用三
性之養猶為不孝也

右傳之七章釋如子事親及不敢與侮
子曰五刑之屬三千而罪莫大乎不
孝 要君者無上非聖人者無法
非孝者無親此大亂之道也

右傳之八章

子曰君子尊上進思盡忠退思補過
將順其美匡救其不義故上下能相親
詩曰心乎愛矣遐不謂矣中心藏之

何日忘之

右傳之九章釋中于事君

子曰昔者明王事父孝故事天明事
母孝故事地察長幼順故上下治天
地明察神明彰矣故雖天子必有尊
也言有父也必有先也言有兄也宗
廟致敬不忘親也修身慎行恐辱先
也宗廟致敬鬼神著矣孝悌之至通

于神明光于四海無所不通詩云自西自東自北無思不服

右傳之十章釋天子之孝

子曰君子之事親孝故忠可移于君事兄悌故順可移于長居家理故治可移于官是以行成于內而名立于後世矣

右傳之十一章釋立身揚名及士之孝

子曰閨門之內具禮矣乎嚴父嚴兄妻子臣妾猶百姓徒役也

右傳之十二章

曾子曰若夫慈愛恭敬安親揚名參聞命矣敢問從父之令可謂孝乎

子曰是何言與是何言與昔者天子有爭臣五人雖無道不失其國大夫有爭臣三人雖無道不失其家士

有爭友則身不離于令若茲有爭子
則身不陷于不義故當不義則子不
可以弗爭于父臣不可以弗爭于君
故當不義則爭之從父之令又焉得
為孝乎

右傳之十三章

子曰孝子之喪親哭不依禮無容言
不文服義不安聞樂不樂食旨不耳

此哀戚之情

三日而食教民無

以死傷生毀不滅性此聖人之政

喪不過三年示民有終為之棺槨
衣衾而舉之陳其蓋篋而哀感之擗
踊哭泣哀以送之卜其宅兆而安厝
之為之宗廟以鬼享之春秋祭祀以
時思之 三事變敬死事哀感生
民之本盡矣死生之義備矣孝子之

事親終矣
孝經終

二十四章孝行之錄

二十四章孝行之錄

太舜

隊之新イロハ春象ナリ

嗣堯登寶位ニシテ

漢漢文帝

仁孝臨天下ニシテ

漢庭事賢母ニシテ

紛之ニシテ毘ニシテ草禽ナリ

孝感動天心ニシテ

魏之冠百王ニシテ

湯藥必先嘗ニシテ

曾參

母指纒方嚙

負薪歸未晚

閔子騫

閔氏首賢良

首前留母在

劄子

見心痛不禁

骨肉至情深

何曾怨晚娘

二子免風霜

老親思鹿乳
若高聲不語

江草

負母逃危難
哀告俱獲免

子歿

負米借耳音

身掛褐衣
山中帶箭歸

窮途賊犯頻
痛力以供親

寧辭百里遠

身榮親已歿

董永

葬父貧方兄
織絹償債主

陸績

孝弟皆天性
袖中懷綠橘

猶念舊劬勞

天姥陌上
孝感盡知名

八間六歲兒
遺母報乳哺

唐夫人

孝敬崔家婦
此恩以無報

吳猛

夏夜無帷帳
恣集膏血飽

王祥

乳姑夜盥梳
願得子孫如

蚊多不敢揮
免使入親圍

繼母人間有
至今河水上

郭巨

貧乏恩供給

黃金人所賜

揚香

深山逢白額

一祥天下無

一片臥水摸

埋兒願母存

光線照寒門

努力搏腥風

父子供無恙

朱壽昌

七歲生離母

一朝相見面

虎豨婁

到縣未旬日

願將身伐死

身脫創口中

參商五十年

喜氣動皇天

椿庭疾遇深

北望啓憂心

黃香

冬月温衾煖

兒童知子職

姜詩

舍側井泉出

子能知事母

老萊子

炎夏扇枕涼

汗古一黃香

一朝雙鯉魚

婦更孝於姑

戲舞學嬌癡

雙親開口笑

蔡順

黑椹奉親闈

赤眉知孝順

王裒

慈母怕聞雷

春風動綠衣

喜色滿庭闈

啼飢淚滿衣

牛米贈君歸

米魂宿夜臺

阿香時一震

丁蘭

刻木為父母
寄言諸子姪

孟

泪滴朔風寒
須臾春笋出

到墓遠千回

形容在日身
聞早孝其親

簫之笋數笋
天意報平安

山谷

貴顯聞天下
親自瀉溺器

平生孝事親
不用婢妾人

二十四章孝行之錄終

鴈之讚書

松茂氏

宮良記

山公
齊祖
...

夫鴈ハ仁義ノ禽ニモ或ハ二十或ハ三十皆相
讓テ行ヲ列チ尊者ハ前ニ在リ卑者後
ニ在リ預メ次序ヲ正レ而シテ後ニ飛ブ者十
リ雄其雌ヲ失ヒ雌其雄ヲ失フ如キハ死
ニ至ル迄フタヒ配セス此ニ因テ此禽ハ仁義
禮智信之五常ヲ備ヘリ此禽空中ニ於
テ伴ヲ失フ時ハ盡ク哀鳴ハ此乃チ仁ナリ
一タビ雌雄ヲ失フトキハ再ビ配セス是乃チ
義也次序ニ依テ列ヲナレ飛ブトキハ前

後ヲ越ズ是乃千禮ナリ預メ寒暑ノ至
ヲ知テ江南ニ來リ自ラ能ク其難ヲ避レ
是乃千智ナリ毎年秋ハ南冬ハ北其時
ニ背テ來往ス是乃千信ナリ如斯五常
ヲ備ヘタル者ナリ

夫誠ハ善ノ一也
而己ノ善ヲ
以テ人ノ善
ヲ知ルル者
ナリ

經典

補註

常四時周復始循環不窮乃天道流行不易之常理

健スフヤカリ陽ニ属ス

陽有衆萬物之功剛之正直

仁禮陽トシ健トス

遂乘金德生之十リ

循ハレタガフ環ハメニル
九序也 則ハニル

乾天健元春木仁肝酸父子

亨復火禮心苦長幼

常四象土信五脾甘五朋友

利四德秋金義肺辛君臣

貞不易冬水智腎鹹夫婦

坤地順陰有發生載萬物之功柔順ノ順ハ陰ノ也陰ノ屬ハ

利貞遂乘土德成就十リ

義智陰ノ順トス

欽撰

天文地理以季以伏犧レ河圖ヲ出テ曆易水波レトク
常ノ愛ノ差有レトレト其源一也所傳曆ハ是性命ハ
理小深ハ國人ト安下政ト務レルレハ至要也故小黃帝
河圖ト云テ天文ト傳レ歲時ノ遷移考レ水辰ト院レ
支ト記レ白印ノ内ト別レ晦朔同月ト則曆始テ制レ
帝舜猶城衛ト立レト七政ト齊一曆ト治レ民ト教レト
必兼世ト道ト重レ人ト用レ集レ事ト備レ記レ生レ和漢ト
歲分リレ之ト聖レ人ト曆ト理ト也ト其ト真ト首ト

宗て終事此曆美漸是也中地理と稱る故地理の差
蓋天文地理と云ふなり故小異國此地形異程なり
天地一理也差感氣平西海小波時所陽小三て明
朝以儒宗見て天文地理と明客白後今古通也
一平中中海衡獨理小通中宗考中六
渾圓也自然小陰陽之行也具小其氣の程也
動之小理て天月小充満中重之中止て地之凝り氣小
抱之也て中央小居是形也生の始也地理小由形なる
物也地之精氣也中天を雲火形也陽精氣也
水形なり陰精氣也萬物皆之也小均中也小終て
初る也天地陰陽相別也之也一也之也
夫日月夜生形有故何人書曰實小形也小亦
日也炁炁光也火也精也故小星也月也
虹形也水精也故小冷也成を氣生也小同
亦日月夜星何小由て常小運轉也曰陽也
動之也宗て止事也精也小得て中成
曰同形也萬物變化也亦地小野山有也高合宗亦有
且河海有也其故也曰陰の象也精也中

ツカサト

造りて射る陽精と清く因ふ凝り終る薄くして地生る
言依て造の多少薄くくこの運送小由る是と人射て
之の造別射と潤と血なり古砂は因也金石髓骨
車水は毛髪なり常小陰陽は二氣と飲食は其射と
養と潤造と流水は溪澗川河は造と造て海は
陽小入る是二便の造造なり人倫の色小は因
生る物此のこゝ亦天地一体は理あり其射は
何意と天地則也陰陽とて体は成陰陽と
育養陰陽とて魂魄とて是是自然の理なり
強陰の形なる射と陽造を火と生射火小潤
火の射小潤を養とて交とついで心火と成天極是
陰陽造化は極と包名て大極を渾然と其既判
小及二義とて是は家とて小形とて行とて小本
萬物とて小生階級施事消長の道人莫測故小
乾道は成坤道は成二氣交感萬物は生る射別
小は谷視海の等と百千と養小とて齊とてはとる
成化元年癸未臘月中和日

田中藤兵衛撰百撰集

五倫の義

父子有親

父子は同じ父慈子孝なりて親しむべき

天下に所^{ユル}在^{アラ}人の事と云ふ分きて其倫を云其倫を其教と謂て
子教とも云り其内父母子と生るる天地の萬物と生るる
道理を出て父子の倫を定むる也親其教と云て孝慈とい
ふ孝は子に父に事するに母は子に父に事するに如く父子
はるもの事と云はる事なり必敬戒し居り若し自ら其事
漏れて子に不親不敬といふは是れ是れ禽獸の子と云はる事
也其事には必ず其事するに去る食はるは其れ其れ勤る事なり及

初る力に悞て父母は志す東省候より居り候されい候れ
孝にいつく個其其簡要と云ふ父子同氣一沙の志をれ
一糸毛既も隔なく先角小自然の親とて不失と申言さる
居り候れ故に聖人父子同氣と云ふ一語とて不易の
法と定め候所相父事と親と云ふ一語とて永く父子の
投を候れ。○父子同氣天性より正け合ふ所親と云ふ
陳の困りしと云ふ止まる處との道あり候度候極道と
云ふやうて陳し居り候り父母は道と陳し候極道と云ふ
道と云ふ候小己の頑固と悟ふ。○孝と云ふ候て陳し居り

初る力に悞て父母は志す東省候より居り候されい候れ
孝にいつく個其其簡要と云ふ父子同氣一沙の志をれ
一糸毛既も隔なく先角小自然の親とて不失と申言さる
居り候れ故に聖人父子同氣と云ふ一語とて永く父子の
法と定め候所相父事と親と云ふ一語とて永く父子の
投を候れ。○父子同氣天性より正け合ふ所親と云ふ
陳の困りしと云ふ止まる處との道あり候度候極道と
云ふやうて陳し居り候り父母は道と陳し候極道と云ふ
道と云ふ候小己の頑固と悟ふ。○孝と云ふ候て陳し居り
初る力に悞て父母は志す東省候より居り候されい候れ
孝にいつく個其其簡要と云ふ父子同氣一沙の志をれ
一糸毛既も隔なく先角小自然の親とて不失と申言さる
居り候れ故に聖人父子同氣と云ふ一語とて永く父子の
法と定め候所相父事と親と云ふ一語とて永く父子の
投を候れ。○父子同氣天性より正け合ふ所親と云ふ
陳の困りしと云ふ止まる處との道あり候度候極道と
云ふやうて陳し居り候り父母は道と陳し候極道と云ふ
道と云ふ候小己の頑固と悟ふ。○孝と云ふ候て陳し居り

一、孝の人の位也。小の段、孝者、人など一度のふはさきより
と云ふは、このや、禮成亂るるより、福乱るるのふは、
人君子より、公陳、去るるに、親より、定嗣する、遺體と保と
り、この亡刑に、これ、災に、修ふ、父母、其、始、た、た、目
大宋は、慙、と、由、て、父母、其、體、と、表、こ、こ、は、是、の、為、の
子、より、○天地、其、性、と、所、理、也、天地、小、の、中、に、理、と、云、人、家、道、
生、ま、る、時、に、生、ま、る、人、より、養、さ、る、の、を、人、養、物、は、中、の、理、と、養、也
又、人の、行、ひ、の、中、に、孝、道、を、養、さ、る、の、を、父、の、天、道、と
は、ぎ、継、て、修、め、る、故、天子、と、云、天子、と、云、天地、事、は、れ

道、と、外、外、事、を、孝、道、に、外、ら、る、也、孝、道、は、公、祖、と、云、い、れ
は、く、中、の、時、に、日月、星、は、三、光、と、云、空、日、星、と、云、り、て、天、運、清、く
修、め、る、也、と、先、金、と、云、日、月、星、は、三、光、と、云、い、れ、災、の、を、く、
有、り、類、或、は、彗、星、客、星、は、此、の、類、の、災、を、云、り、空、日、星、平、に、
日、時、の、氣、候、平、に、潤、り、寒、日、星、は、時、を、く、云、り、日、星、平、に、
大、風、洪、水、は、災、に、云、り、云、り、
若、臣、有、義、

若、臣、有、義、 君、臣、同、若、臣、と、使、た、禮、と、云、り、君、に、事、す、に、慈、と、云、り、君、に、義、と、云、り、
若、臣、不、は、道、理、夫、の、上、に、位、地、の、下、に、位、是、る、道、即、ち、是、る、道、と、云、り、
若、臣、不、は、道、理、夫、の、上、に、位、地、の、下、に、位、是、る、道、即、ち、是、る、道、と、云、り、
若、臣、不、は、道、理、夫、の、上、に、位、地、の、下、に、位、是、る、道、即、ち、是、る、道、と、云、り、

悉其德小者以共化之受て其性不_レ遊是美物有_レ者
なり各其兩に能得_レて地道安寧ありたり

夫婦有別

夫婦は同に各定偶なりて是れ

天下陰陽の道に人夫婦あり陰陽和合して万物を生有_レす
夫婦和合して子孫を生有_レす夫人の理は夫に随ふ陰陽の
倡_レは夫陽の先を以て陰は倡_レは陰流して陽は流_レず夫
自然の理也主理ふ_レて夫婦の倫と定むるが如し夫に剛
正を法_レて中_レに徳と兼_レふ婦は柔_レにして夫に剛
を以て法_レて柔_レにして一節_レに柔_レする徳と兼_レす夫は剛

即_レ寵也_レ夫_レの事_レは_レの_レなり_レ但_レ其_レ管_レ要_レとい_レて夫婦和_レす
睦_レは_レ内_レの_レ事_レなり_レ外_レの_レ事_レは_レ外_レの_レ事_レなり_レ男_レは_レ外_レの_レ事_レを
女_レは_レ内_レの_レ事_レを_レの_レ遊_レは_レ且_レ女_レの_レ事_レと_レなり_レ
外_レの_レ事_レは_レ別_レに_レする_レ也_レ故_レに_レ聖_レ人_レ夫婦_レの_レ同_レは_レ別_レに_レ
別_レの_レ一字_レと_レ易_レは_レ法_レと_レ定_レは_レ所_レ謂_レ夫婦_レの_レ同_レと_レ云_レ一向_レ
承_レ夫婦_レの_レ授_レ受_レなり_レ有_レ別_レは_レ別_レに_レ配_レ對_レ也_レ合_レ也_レ
也_レ偶_レ也_レ合_レ也_レ對_レ也_レ夫婦_レの_レ同_レは_レ夫_レの_レ同_レと_レ云_レ
有_レ別_レは_レ夫婦_レの_レ同_レに_レ別_レに_レ易_レは_レ故_レに_レ夫_レの_レ同_レと_レ云_レ
別_レは_レ夫_レの_レ同_レに_レ別_レに_レ義_レ有_レ各_レ有_レ別_レ是_レ別_レとい_レふなり

仁に己を行ひし私を事なり仁と稱ふことこの情は小意のまじり
 朋友の相拘ふより仁をせしむる義とあること、身のと儀は
 身のことく、小若とはその義を中へ入る人又、この
 ありし小交のまじり、柔弱のゆるい、又、訪ふ義
 ありし小交と、換友を、換友と、求む換友を、意は、
 院戒中へ、應勤し、て、交を、作其、善を、と、朋友、
 物と、ひ、か、さ、し、事と、相、ら、す、の、れ、中、一、貞、信、の、相、款、を、
 中、言、を、一、に、ひ、か、さ、し、事と、相、ら、す、の、れ、中、一、貞、信、の、相、款、を、
 法、と、定、め、し、所、稱、朋友、を、信、の、ま、一、句、に、ひ、か、さ、し、事と、相、ら、す、の、れ、中、一、貞、信、の、相、款、を、
 友の、其、友、と、忠、也、と、云、い、お、ま、小、仁、と、稱、ふ、は、若、し、不、義

ありし、時、に、其、心、の、誠、を、ひ、か、さ、し、事と、相、ら、す、の、れ、中、一、貞、信、の、相、款、を、
 ま、と、あり、ま、り、也、と、云、い、心、の、誠、を、ひ、か、さ、し、事と、相、ら、す、の、れ、中、一、貞、信、の、相、款、を、
 義、理、と、い、ひ、て、傳、ひ、し、と、云、い、る、時、に、其、心、を、ひ、か、さ、し、事と、相、ら、す、の、れ、中、一、貞、信、の、相、款、を、
 傳、る、時、に、却、て、中、意、と、あり、辱、め、と、ら、る、あり、。衆、人、自、事、と、交、ふ
 人、小、法、事、と、傳、入、る、事、は、時、間、の、く、あり、其、友、の、事、聞、と、知、り、
 其、に、軍、器、を、知、り、し、小、劍、小、かり、死、あり、と、云、い、。心、を、
 友、小、交、る、小、和、順、の、心、を、一、り、で、事、ふ、と、ら、る、を、ひ、か、さ、し、事と、相、ら、す、の、れ、中、一、貞、信、の、相、款、を、

○**中家**
元、色、に、傳、て、天、と、統、ふ、り、乾、は、徳、元、と、云、い、不、變、也、則、人、の、首、也、也、且、は、運、動、別、
 重、復、は、言、ら、り、と、胸、膈、 貞、は、則、元、氣、比、初、る、也、あり、

元

亨

利

貞

時 春

元東小屬 春南小屬

夏

秋

冬 貞北小屬

生物之始一也 終之也 終の位ありて 是も同之なり

曰時 於之 養之也 人の性 於之 仁也 是も養之は長なり

生物之通一也 終之也 終の位あり 曰時 於之 養之

人の性 於之 禮也 是も養之は合なり

生物之通一也 終之也 終の位あり 曰時 於之 養之

人の性 於之 義也 是も養之は和と濟なり

生物之成一也 終之也 實成 終なり 曰時 於之 養之

人の性 於之 智也 是も養之は幹なり

五事

一曰 貌 俯水也 既生 別聲 音食て 乃言故

二曰 言 既揚火也 言能く 視る故

三曰 視 教水也 既視て 後聽く故

四曰 聽 收金也 思去 原て 心通て 曰去故

五曰 思 猶古 曰思 辨也

貌 曰恭 貌 養有て 恭 齊 莊 中 正 有 貌 即 有 恭 之 德

言 曰 從 言 有 多 之 從 順 理 成 章 有 言 即 有 從 之 德

視 之 德 云 明 未 施 して 神 有 德 思 聽 之 德 云 聽 知 未 感 して 虛 去 何 同

思 之 德 云 養 凡 恭 從 明 德 之 理 皆 有 道 以 五 事 之 序 也 然 亦 有 物 亦 有 別 故 其 義 微 也 五 事 之 德 亦 有 用

水と仁と云々別也此理也

水と仁と云々其形実

火と禮と云々別也此理也

二六火と云々其體別著

五行

土と信と云々別也此理也

三六土と云々其質最

金と義と云々別也此理也

四六金と云々其體固

水と智と云々別也此理也

五六水と云々其體最激

仁と毫と云々別也此理也

水火の氣有るや否や也生可

義と宜と云々別也此理也

草木の生有るや否や也和可

五常

禮と敬と云々別也此理也

禽獸の形有るや否や也義可

智と別と云々別也此理也

人爲らざるや否や也智可

信と實と云々別也此理也

天下此類して是

五常要義

人性綱

善仁義禮智は五行の徳と云ふは人生稟而此天理命
の善若く不徳とは四徳の善以義と云ふは仁の善に止
む小徳と云ふは仁の徳の相らざるは信と云ふ徳は仁の
ありは信と云ふは仁の徳の相らざるは信と云ふ徳は仁の

仁

徳也善也別也此理也

慈なりむ 外小徳なりむと云
電なりむ 心小なりむと云

天に具する道理と云其道理人小具する仁義禮智

ある其内仁は天小有るは善小なり元と名づく陽氣は

養生する道理なり養生の物と名づく生は此と云其

道理と人に定て仁と名づく徳和慈也善は此氣の

徳和あることなり人痛憐むるは人なり是仁なり

其心懐なく憂と云ふをさうも亦石小ひしと云ふ仁の
心は潤川て人との物と傷や常小道理の感ていふ
思電するんらると仁を感す。○治和也柔也物やわら
かるて治和と云うんくしと云ふと慈電と云ふ其の不遠
惻隱之心仁を感也治和也非人也惻隱と云ふ心と
よむ惻傷の功なり隱痛の深也心小生は可むん
天地は性なり理也天地にありては理と云ふ東漢の生る
時に生るる物なり小は理をうけて生るるなり其氣は心
備へ生る人より養ふものなり人小物れ中の空りて

淡かり又人の行ひの中りては孝道より大なる養ふものなり
又人具足するもの心は金徳分ては仁義禮智と云ふ
仁の小は生るるなり仁を感する并電は親小と云ふ
孝道は才一系物と云ふ也又天地は生成する氣
形なり理心と云ふ也賦は人を行は考するなり是場や
中間生る也天地は功なり人小らざれば成就する也小養の
心天地を養ひて其化育となす故小天地は心と云ふ也
陰は圓なり象天是の方象地也天小同なり九解之音
六十日なり天小同なり空裏なり人小亦夜共善怒らるる故

陰必雲肺と為亂肝の風情の互射を言ひて
天地と相参る也 仁は射則臨に用ふり

義

判断裁割則宜之理なり其意を羞惡

夫小至ては秋小至て利と名づく陰氣は肅敬なる道理
肅敬は草木の意と為一実と信じて羞物と為一定の
事也其道理と人にて義と為故小裁判断則其夜
賊とて裁する依小道理と宜く之をわらふんを重懲に不
及ひはあらざる義人のそれを一毛と云ふ一毫の二毫と
一云と云ふ一と事ハハハ生應三時生死生三時亦故也

約法にして少も其節と違ひざる也義と云應一〇則ハ
裁也又法也制ハ節也裁ハ節也又裁也則ハ則也裁也
曰字ハ中節也と為と三事と云云爰そハ事理ハ宜小
際てそれ小意ハ事也一ととと云云義心之制事ハ
宜也羞惡之心ハ義之端也是中ハ非人也彼ハ小不若の
事の有と和ハと思ハ羞也人の不若と見て是と小とハ
惡ふり 義ハ休羞惡ハ用ふり

禮

恭敬持節則敬は禮也其意ハ恭遜

恭ハとやリニ 形小なりと云
敬ハとやリニ 形小なりと云

夫小至ては養小至て有と名づく陽氣は長養の意

道理の長短と云ふ物に長しき事ありて短しき事ありて道理と人々して禮なる故に恭敬辭儀を
敬以候物と辭儀は禮なるあり共若し人々を先ずて
衣冠平しく威儀礼らむと云ふ事と禮なる人々を先ずて
己と後より其外より行ふ何事にも儀を禮と云ふ
かゝ自由を言ふ者先ず論する儀を又いふ時略して後意
ある事と云ふ禮と云ふ。○恭敬の言はらふ事多し
禮節の法度也格も敬抄あり三事にらむこと一は
心小しと云言の禮物と云ふまじらふ事と云ふ法度と
儀道は礼小しと云辭儀は心禮之端也是云ん非人也
辭は辭儀云に云たは令教乃小功の有と人あり時
儀功小非と云の辭儀云に云儀は推して人小非也
右の功をたは是と云人の功ありと云人小なり其儀あり
禮は辭儀儀の用なり

智

分別是非別則之理なり其教は是非

天下をてい冬小ありて貞と云はる陽氣は凶をさる道理なり
凶をさる事小は極小なり云はるに穴ありて故に事物
同をさる事あり其道理は人々して智なる故に是非也

分別多しは人非是也トラスレの大明の如く其心は清く澄み
氣は純く信じて其見方の如く定る事ありこれ各其
心に保つて居りて書け氣づくと信じて常々静の心
根に入つて物と管をもちつたは物小向ふ時あり是也
逆するは信と不信と。分別は人非是也と分別で
是は是と非は非と此は是と是は人智と信也
是也と人非人也善と信じて若くは悪と信じて
悪と信じて信是也の心を用ひ

信

中央別業有る理あり其意なる信

正不正と云はれありて定る信有り云はれ世信ふ
古用は事ありされは信ふに古用ありと仁義禮智
の道は信ふ道は仁義禮智は外は信は信理と信ふ
あり仁義禮智は其実ある道理と云事とありて
信は信は信は氷は冷ふ火の煖は信は信は信は君は
事(父母)に事ありて其外ありて人交ふ事ありて
其心は實りて用は私と不信は外は信は事と信は信は
道理の一篇と守り信は信は信と云事と。實は
公道と行ふ實は吾一は信の道と信は信は信は

卑しきしつ時に出でて、其徳体明小通達し顯明せし
其徳曰海と光し輝し美事に以て通云とあり。○人月ふ
りて、父子親愛し道なり外小出て、君臣忠義し道也
是を偏の内父子君臣は道別て行ふ處に大徳は理を
忠信し君小毒する云際と云く是惟分明小極め云て
隨正と云く君若悪小毒ひまの如く小毒ること多し若し行ひ
むは道小闕け失ふありは、是より云と道と偏ひ害ひて全
をて、後陳と云んとと思ふなり君若人の如く内は、
と君と其相ひて、扶助しきで感徳せしむるあり其若

大あり亦小及ぶと云んとと思ふなり君と一と云ふは、
匡一と云ひて、一と云て一と云と止むるあり其外小形も、
と云とあり。○君を道ある内は、後陳しきとも困ひて却て
と云と云わらむ國亡る小毒る殊小伏と云とも陳じ是忠
義なり。○天人の道昭也、と云毎に孝と云て夫也明孝の
天道自ら明なり美事感徳ふたは、みりるありと云
倡導感と云意、彼より後陳と云是、破少りて、
華の響を形小影らるること、神明彰き鬼神著
神明通し、曰海と光と云、其事なる感徳は、理の如く

五志天地小亦さうと明きる時、氣藏感してなりと
如くあり、^{イラン}新そ神明、造化は功用あれ、形はありと
なるをさしり、其福祐と降して、何れ妖愛や、^{イラン}新
なり。○神明と云、造化は功用と指て、その造化は天地
形為する所と云、功用は是を見ても、亦はその中、亦は
日性月素の養生、長長より類あり。○天地小亦さうと
上は如く、その時、神明、洋よりて、其類小と、如く、その時、
在、如く、その時、亦、成程、在、如く、その時、亦、洋と、流動
は、流は、見、その時、水は、流、その時、亦、あり。○人身、陰陽は

二氣、陽と云、鬼と云、陰と云、以、死、時、陰陽、新、教、て、
魂、池、小、深、其、子、深、穢、と、云、一、教、と、云、く、て、奉、祀、と、い、
其、魂、鬼、亦、格、て、其、祀、と、云、く、る、理、あり。○鬼神と、陰、
陽、二、氣、正、伸、性、亦、さ、る、其、と、指、て、云、神、陽、は、正、氣、は、
伸、る、亦、あり、鬼、陰、の、正、氣、屈、する、亦、あり、人、亦、さ、る、時、其、
鬼、氣、と、鬼、氣、と、鬼、と、云、く。○天、陽、也、正、健、と、云、正、位、
父、は、道、あり、亦、と、地、陰、あり、正、順、と、云、正、位、を、母、あり、亦、と、
天地、と、云、く、て、乾坤、と、云、く、天地、の、形、體、あり、乾坤、と、云、く、
たり、乾、は、健、り、て、息、の、揚、は、物質、て、以、降、る、亦、は、云、く、坤、は、

順中、帝らの招き物降して生るるものあり是乃
天地は天地する由介してあり是物も父母するものあり
氣と天小東形と地小賦、藐然の乃混合して同なりて
中、位を子の道なり乾陽坤陰、道天地は氣而同小
寒、人物は資して生るるものあり故小天地は寒、言の
難かりと乾、健坤、順是天地は性なりは氣、物、人、物
皆て、性、多る、而、は、さ、り、故、小、天、地、は、伸、其、性、と、云、深、く
さ、と、察、ま、れ、別、乾、父、坤、母、混、沌、中、虚、ま、り、其、實、
見、る、一、人、物、天、地、は、同、小、生、生、其、資、て、生、る、る、の、あ

皆天地は伸なり全體不偏高生に殊あり故小其性
於てなり明暗は柔、惟人也其形氣は、心、境、て、是、心、心
を、意、り、て、性、命、は、全、體、小、道、ま、る、と、い、り、蓋、生、は、中、小、於、て
同類を養、と、ま、る、の、あ、り、故、小、同、胞、と、い、り、別、其、道、と、云、る、と、
示、也、見、中、の、如、く、惟、小、道、同、胞、の、人、故、小、天、下、一、家、と、中、國、と
一、人、と、一、同、を、故、中、物、と、別、の、形、氣、は、偏、と、境、て、性、命、は
一、中、小、道、ま、る、と、い、り、故、小、我、と、類、と、同、と、云、て、ま、る、と
人、の、貴、小、亦、其、體、性、は、さ、る、と、云、つ、ら、む、小、是、亦、さ、る、と、
天地は、は、は、け、て、ま、る、と、云、つ、ら、む、一、同、也、故、小、吾、則、其、道、と、云、
て、
十、三、

肝

肝と膽は脈と新出風水

目肝小屬目和黒白とある也

春仁小屬

肝竅と目小開くあり

眉肝小屬木氣と重る也

心

心腸と脈所公君とある也

舌心小屬火と重る也

夏禮小

心竅と舌小開くあり

髮心小屬火と重る也

五臟脾

脾胃は脈と新出

口脾小屬土和刺殺味とある也

中秋信小

脾竅と口小開くあり

肺

肺と腸と脈と金と出る也

鼻肺小屬鼻和刺者鼻とある也

秋義小

肺竅と鼻小開くあり

毛肺小屬金氣と重る也

腎

腎膀胱と脈と水と出る也

耳腎小屬耳和刺者腎とある也

冬象小

腎竅と耳小開くあり

顔腎小屬水と重る也

書法式

一筆法此書に上根千字と書以中根七百字と書以
下之音字と多ふと之を強ふと一字と書と之を
弱ふ千字と書と之を強ふと之を弱ふ

一取放の白真の言と之を行の由と之と之と草の
一と之と其の言の三休真の言と之を行の由と
同と之と其の言の三休真の言と之を行の由と

一視の由と之と其の言の三休真の言と之を行の由と
一視の由と之と其の言の三休真の言と之を行の由と

蘭紙の色を好むものありて其柄を好むものありて其湯を洗ひ
膠と塗て干して用ゆるものありて

一 此紙は秋葉の葉^{サヤ}とて丹冬に之を洗ひて書ゆるものありて
洗ひて用ゆるものありて色和之を出入り給ふものありて

一 紙よりくして墨不付の白水とて墨と指て書ゆるものありて
名紙令箱塗物などのよふ書内墨付を以て解すは
粉と墨不付て書ゆるものありて

一 石より小物と書付て後の世まで之を法のものとして
用ゆるものありて書ゆるものありて

書いざりし物と書ふものありて其色と書ふものありて
其の理ありて書ゆるものありて其の法ありて書ゆるものありて
折衷のよふものありて其の法ありて書ゆるものありて
よふものありて其の法ありて書ゆるものありて
空海石よりしりし事ありて其の法ありて書ゆるものありて
書法ありて其の法ありて書ゆるものありて
書道と書ゆるものありて其の法ありて書ゆるものありて
女人と書ゆるものありて其の法ありて書ゆるものありて
其の法ありて其の法ありて書ゆるものありて

何ふ終事と着体法度一ふ其處小處して宿佛
うて是と思ふことせよ初事既小く事とて
る一事とてその内まゝ別事と求むること
且汎濶容與して自今以自とて進意念を
る一自とて若くは六とて場へかまふ間を以て別は修練
法より字と修練事人の眼と修練こと一月より十日まで
先眩廓とてその後形体と修練は支百竅一肉とて具
今自一目と修練し明日一日と修練す小く亦若くは修練とて
是と求むる事修練は文字修練とて修練事と別は
意とて一人の心と修練すものなり

- 一 古人書けり累は月の事其累は月事と修練に違ふるの累
允けりすく居るを修練後世に先とて修練事と修練其
香ん事と修練其累は月事と修練を故に進修百修練念
修練其累は月事と修練其累は月事と修練其累は月事
一 累は月事と修練其累は月事と修練其累は月事と修練
膠は氣和りて修練修練事なり唯二十年の後
百念とて用ゆる
- 一 世よりして其累は月事と修練其累は月事と修練其累は月事

漢代の中絶やして王次仲右法と謂う條條やして
又漢小後漢小或して蔡邕点画と指して永寧の八法と
似て隸として隸の書法とは附小定むとて程邈の隸書
金匱の隸の秦小始之とも漢小を蔡邕小始の故小漢隸
と指す書と号し解法指して秦漢とわたり隸は古今の
別として武法と邈の隸の真を故小指すとも亦真とい
ふ書ともふり

一 晏妙篆曰谷と他の秦に王次仲有り古今法書苑に云
小篆教して八分生を八分取て隸書出と史谷は字體

勢ハ八分小篆ハ少ハ八分と云

一 行書は晏妙篆に云は書と他の後漢に顔川劉涪界
たり曠の書に依り替り簡易小從て亦是と書流は
亦是と行書と云

一 章牘の書に云漢に黄令史游が他の亦有り亦是に云は
文字と書かたりて子づふらと云書る文字とくはつら
ひきに文字ばりより中法と用ふ處へかて向ふ人
ひ合へ書なり

一 張字とぬ法に書換へる附して史湯小後と云り

張るる字とする處は、以て其の字を以て書すべしとす也

但し其の字を以て書すべしとす處は、以て其の字を以て書すべしとす也

一字と書換へる處は、以て其の字を以て書すべしとす也

不ろく其の字を以て書すべしとす處は、以て其の字を以て書すべしとす也

悉く其の字を以て書すべしとす處は、以て其の字を以て書すべしとす也

壹門觀之始

光緒十年甲申九月九日寫詞也

魚水之解

麥茂姓

當宗

池のあはれ波三つうりてうらみ出る
祖山是也程たまの詩心満頭白髪
児孫成守りといひ富士乃其心
をん仁者樂心智者樂水の本心
をまればいぬをいひも光てまれ
うらみ縁をまゆ折にその赤人う田子
乃浦よ赤いそく思ふ白髪は富士の

言收に雲のぬりけいのかこぢもひそ
まひていふ汁清心まじしふまゝ
造りてよにまじりてあつて
よるよのあつて剛明の菊城屯
白樂天の竹城屯一源溪の蓮池
屯し明道乃皇池城先てむり
かと深やこつありとうやれこれあひ

清きく流ひきりまじりあり
ふけく心乃友の朝のまじり
らん岩の池水

真水の解



夏の江子娘小まじりかきこまじり
朝のあつた皇池城後市もまじり
金真水まじりてりけいも竹西もまじり

い。魚。家。り。身。を。賣。成。表。す。い。ら。る。家。見
こ。ら。ら。り。や。わ。道。こ。う。よ。炎。天。如。懸
し。て。心。こ。う。う。う。一。水。成。も。て。あ。ま。い
ま。し。か。い。成。こ。ん。ご。かり。竹。西。歩
く。し。て。君。の。い。ふ。不。留。乃。使。ま。さ。ま。の
婦。女。と。し。よ。い。よ。く。あ。ま。る。よ。と。かり。そ。し。く
賣。と。水。と。成。親。さ。ふ。い。な。味。深。長。かり。む。

あ。道。と。い。え。ん。に。あ。ひ。て。糸。と。の。あ。ひ。の
そ。う。や。成。う。と。あ。り。合。れ。こ。ま。い
は。の。ら。ま。り。又。早。下。か。家。成。見。か。し。と
た。し。わ。ま。ま。を。ん。し。早。な。ま。ま。茶。と。成
魚。い。あ。ま。り。ら。ら。る。わ。と。い。ひ。ほ。く。と。ん
折。入。う。と。い。え。の。成。見。て。心。う。ち。り。り
う。い。え。い。な。茶。か。又。い。ら。の。あ。ん。ん。わ。ま。

およよ。津ぬるふとかり。まことの池を渡る
いとよそそ。ま。ゆるゆると。流るよし
ふりふり。と。あ。かり。人。欲。つ。り。て。天。理
流。行。の。時。よ。及。て。水。は。と。流。る。ふ。と。く
よ。あ。は。て。い。ま。ん。こ。の。ま。も。あ。り。あ。ま。ゆ。す
止。水。で。覧。と。む。う。人。の。い。あ。れ。け。ん。ま。又
見。る。魚。老。る。と。壯。あ。り。し。知。り。ま。も。

海。を。そ。り。く。う。ち。む。り。て。い。と。や。れ
け。ふ。遊。泳。を。も。あ。り。ま。る。ふ。の。の。言。見
枉。者。の。冠。衣。む。い。人。童。子。の。七。人。を。こ
ひ。ひ。て。善。美。目。の。長。束。の。り。に。あ。ま。い
あ。ら。ん。と。と。ま。あ。り。理。は。は。く。と
ま。ま。い。と。魚。の。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と
あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と

言れていはいの聖なる人
いん文の前の地海のいん本成り

恭題

武氏池中金魚

一鑑方池數十魚。心機色相兩
非虛。黑紋腹點千金蜜。紅凸
眸光尺水餘。逆捷豈為傷性
處。順行已得受生初。原来不
羨江湖濶。隨所隨時樂自

如。養玩金魚初自宋。惟今只有
後字于玉池盈。短髻著鼓浚。長髻著鼓三
尾生時七尾生。詩想苗題蘓子
疑字于美境。轉廣陵城。若非晤
得從容樂。俗客安知武氏情。
蔡大業汝礪氏謹具

大清光緒十年甲申九月九日
濟寧名園楊視之

用後七叔

松茂長
高宗



礼本表方之書

松濤氏

高宗



[Faint, illegible bleed-through text from the reverse side of the page]

芝菜養方

村山親方傳文

一 古板板七月廿五用之在六和古と小使

一 古板後 又七八日初日(胎) 粉家(古)

一 古板後九月末十月初以霜降

一 古板後留(古)

一 古板之時(古) 尾(古) 壇(古) 古(古) 古(古)

一 古板(古) 古(古) 古(古) 古(古) 古(古)

一 古板(古) 古(古) 古(古) 古(古) 古(古)

入水し... 又古水し... 成る右邊の
下極事

一 種留りの指日復る水是早也

一 二月之月未月古乾して見合小使

一 碗天水は碗は変るも宜也

一 四月を八月迄とて中一月也

一 十月十二月雨天二日宜也

其長と極濃の有也

一 右之古月と朝日宜也

一 正月より空の風流有る古月也

一 夏と落冬と日之宜也

一 日時古乾の時と古水也

附古乾の時と古水也

一 鶴持班お射の時湯煮候に池にお水

冷し富候湯煮候白布と摺落し

お除也

一 四月之末、每葉半分、以酒之取らる
 一 六月七角之時、煮て水汁を以て筆
 但し振ゆり、中時、水煎乾し、以て少
 痛む、射し、為枝、和らば、好む、也、
 他方、二、三、也、
 一 七月之末、八月初、則ち冷、其、為、以、以、一、角、
 和、二、度、以、之、中、應、用、十、月、法、造、と、經、合、造、
 是、後、射、し、水、汁、を、以、筆、

一 又、大、老、其、也、移、し、ゆ、り、枝、を、大、く、以、て、去、
 降、此、法、以、多、く、入、極、目、を、枯、り、事、か、
 一、角、之、造、法、也、以、り、温、む、事、中、中、物、を、流、球、
 沸、圓、之、枝、を、煎、を、以、出、候、中、候、切、る、事、
 取、後、書、記、し、之、
 椿、取、扱、之、法、也、
 一 亦、取、之、七、八、日、程、日、當、上、更、ら、振、と、取、
 不、濡、汝、振、濯、方、之、事、也、

但古極用之如以法三三事

一 格者本以時為一節一凡右七小使水
單方給與時格者筆

一 二月末以文古曰六月迄七後次六月至
用之故次與一之實也

一 三月清明之法舉出共時合次方
只可也

一 小意本及後有之格極者與三事也

お遺後次方其也

一 望者本早速し方一也

一 節一之次十月一二月五小使水方

給与月二二日及計在月四月九月迄

并況け水事方給与七八夜者其月合

濕物也方一也

一 格極留之次十月一二月迄一也

一 月重下之次四季大影一也

一 凡以是烟蟻小虫くつと採集し其法は
附行きのうき丸梅く古白紙

思ふ梅板

一 補ひ古白紙 一 梅古白紙

但し程成る多分古梅板小使交り
合儀皮へ古中十日計おそく
二夜之下も小便水交りあけいたる
日利見合平梅高梅付し事

梅付の時

一 牛皮墨焼細練り漆之條はと迄側へ老若
漆之底は少少身汁入付は是氷と交らぬ

一 梅付方十月宜し

一 今中一用板面天の時小便交り水直

印月迄思度汁用お月以後のみ

の時時々右之法で用お是

一 油如き漆へくくくくくく

一 小便も不可宜らば其子と付て見れば
冷床之時に見合わけるも其の宜く此後
能く再産すべし

用紙六枚

大正元年十月既月廿百首雲御醫長

田嶋親とて清布持くも其家九り也

松原

宮内親とて

高宗

此の増書田嶋親とてその方とて此をく

記

一 カナリ鳥ノ儀雌雄附候テヨリ廿日ニ蛋子産
生ス大スウ三候テヨリ十四日ニ生始出来候テ
十日ニ月開ク亦廿日ニ母子相下カリ生リテ
四日計リ六女モノ男モノ呼リ候テ雌雄分別ニ
成リ候

附喰物ノ儀粟マツジシ胡麻菜種子並

青毛類

一 天國香朝春ハ秋ヨリ冬ハ花大ク白甚シクヤレハ

米ノ汁小便並キヤウナイ又魚洗汁宜シ

一 阿蘭陀菖蒲俗ニ向主花ト花形ハテシレヤグノ様

内ノ六薄黄丸外ノ六赤黄金十二月ヨリ萌出四

五月頃八葉持候得ハ中心出来必花開ク六月ヨリ

クヨリ十二月末頃ヨリ翠出候也 クヤレ天國香同断

右自分心得トシテ大畧書記置候也 申日 十二月

二 法説之由來

史ニ依據云々此神也天地人々わささ

なりむし黃帝の神也為始也之乃國ハ

天子也ささ下此法が方ハ地心のもろかり

ニリ乃法ハ人々此つともなり大法を君と

申法ハ法と云小法ハ民と云男法者濁り

多ク淨極くとも此也く人々君とむりてハ

中ノとあり是君と云か 此法ハと云ん

君は清徳也中流は前如谷川ノ水也
君試みありしを民と貴州を美瑤也
正乃中ノく正徳執行の政成信士は穢い
女は音信きくはとわら流と細也
く不流は月未をくく一第事一若者
正乃民百姓ノ道なり是故知人正乃
人も信とくこのときたれ中上とく一
陰陽の光おと水化生一右乃は下とく

い字一人毎人生變く流い流也なと是徳
高の理之且天地おることや九百九お學
天道と人事ときくわらうもの利女信書信
言の音お通もこのこと一且く天地万物を
我之親わかみんこのことととと人わらう天地
いよもこのこと一且く我亦常なることととと
天地の由とくこの事と是信と得たれ執り
天地の横と信んことととと會就く群也

中ノ居異ニ廻リて居る事多ク一尤非
かりしよしと云ふ事多ク聖人清化され法
事多ク初めりか一邪しくせぬ事多ク
只己が心と沈静して善性持て喜ひし事
市中の邪をば拂ひ妖怪と除けし事
ありし事一憂慮されし事多ク
心那一氣と成りかゝる事多ク法を國と
天と平ふ事多ク又いふ事多ク

此の先男信君政事見ゆ一
安徳の法多し一又信を信士と云ふ事
之己が法と云ふ事多ク一國を亂
れし事多ク女信の法多し一又信を
信と云ふ事多ク一又信を信と云ふ事
之の法多し一又信を信と云ふ事
之の法多し一又信を信と云ふ事
破乳是く云ふ事多ク一又信を信と云ふ事

信

受心六年石月

齊宣公以呂濟字多

た人いふにといふも善人善くつゝるる事こそ
昔よりつゝるるれ其業とていふも世の人
おとあつゝるるに耳も好いあつたていふに
たふいふるも種百千並の事ありつたれ世に
後世にたつてつゝるれ流し我ありたふとつゝるれ
いふと始りあつたつゝるいふとつゝるつゝる
昔と申すといふにたつと勤の流したつゝる

ふ里と申すといふにたつとつゝるいふに
滅るるよりたつとつゝるいふとつゝる
くふとたつた世法もいふとつゝるいふと
風俗もいふとつゝるいふとつゝるいふと
いふとつゝるいふとつゝるいふとつゝる
いふとつゝるいふとつゝるいふとつゝる
いふとつゝるいふとつゝるいふとつゝる
いふとつゝるいふとつゝるいふとつゝる

明王のころのつれなき文がたゞしく行はれる物
も其世のたりの中しゆとて漢にぞいれ拙ふと
君の事とあはれらにけりてとていふは道の
終り東の流もとてわづらひたれとていふは
月ふらふとて早のつとてあはれとて重なる教も
たゞりたつとて道とて早のつとてあはれとて
其世の事とあはれらにけりてとていふは道の
終り東の流もとてわづらひたれとていふは

之をいふとていふは春のつとていふは
唐土の事とあはれらにけりてとていふは
北のつとていふは春のつとていふは
此月乃えとていふは春のつとていふは

大甲文等庵主呂波河詠

今世に生れたる者も皆此の如くありて
ありては其の心も亦此の如くありて
これに生れたる者も亦此の如くありて
いふ所も亦此の如くありて
は此の如くありて
いふ所も亦此の如くありて
いふ所も亦此の如くありて
いふ所も亦此の如くありて

之方なきれば久しき事にも
いふ事なくのしる事ありて
わきまはわかれけりあはれ
六の物のはらひもはらひ
七の物のはらひもはらひ
八の物のはらひもはらひ
九の物のはらひもはらひ

十の物のはらひもはらひ

昔年九月廿七日
男色と好く情欲を
流すは元義如く
今も好く

書札と松

新羅の事も松の事も
思ひぬ書札と松の事も
南の事も松の事も
之列の後 大守公任集流源節忠実と
其の事も日列在角公の事も
其の事も其の事も

若くは真武とて女を勝つ男色を
くろの天いなるも天籟のや宮に
城の西のまをりてと先づいふ
及ゆき文の秋曲関子の餘風を
言を子路の思ひの常に孝伯の文
ゆくと唐詩の道と飲ひまを唐の
心と移り木葉のこころの月夜

なやして待て候ひしと涙を流し
うつらうつらと見れば天籟の
まを唐の詩の道と飲ひまを唐の
心と移り木葉のこころの月夜
なやして待て候ひしと涙を流し
うつらうつらと見れば天籟の
まを唐の詩の道と飲ひまを唐の
心と移り木葉のこころの月夜

永仙と舞ぬの世にまわつてゝしんがら
くたれと思ふを落涙しぬは極く
さへと掛られしや別なまゝのまゝ
詞をくして見やう一巻れお茶と掛
ぬかひし我情のくまをこゝの世に
流すべしと法言くらん心の中を
くたれ思ふは極くは中一巻れ風

けりるの境を現す法は是れ極く
本意を是の極く極く一巻れお茶と掛
永仙と舞ぬの世にまわつてゝしんがら
仙の行をまゝにまわつて極くは極く
さへと掛られしや別なまゝのまゝ
詞をくして見やう一巻れお茶と掛
ぬかひし我情のくまをこゝの世に
流すべしと法言くらん心の中を
くたれ思ふは極くは中一巻れ風

ふかき心と花之汁なり
人々の心は草木一葉も人とは異なる
其男色に心迷ひしは其花を問はし
まゝと海石中を花うらむは
てい武士も心迷ひしは其花を問はし
しり横田氏の状と云ふは横田市物
まゝれ顔色に心迷ひしは其花を問はし

花を問はしは其花を問はし
いふる冬やしも心迷ひしは
久しにわが心迷ひしは其花を問はし
まゝれ顔色に心迷ひしは其花を問はし
何年か心迷ひしは其花を問はし
お中へ心迷ひしは其花を問はし
まゝれ顔色に心迷ひしは其花を問はし

此の書は清書と書かざるが如し

之書に

我はたつてにやん沖の石久と志す

文月六日

栢田市柳

誓之書

之書公人修徳いしし子

中守か句い我忠志を信りた

自ら進み之形又徳府の如し

内に入ると志すや永仁をり此の

情が如く飛神好まことり此

津の源義経が武蔵坊弁慶の情涼

の如しなり此命と名川志人金鏡

之思と結ぬる後新田武敏義治

日一の史り人を義由明は志

伊是行の大なるに生別友は遠く
伊是抄の軍に於ては道志
或るん様をよみ一巻をいへま

せり来りし ちちふと

情あきなるもあはれなる心は海舟の
なする
なするなりちちふとかな思ふは波を
しるし方友好勝なりまきの秘密の

まよに心を感かたはれんとすなりと
或する者の心やうすしてまの
目とあひはひ一巻をいへま
ねんは空門坊と申すなりと
まよとあひはひ一巻をいへま
命もあひはひ一巻をいへま
人々もあひはひ一巻をいへま

あつてはさういふことゝ思ふに昔思案の地は不
成すべし其れはなほいふにたゞに地入のりしか
らうといはれし相成りしを今も分り難
く作らざらん一車をも人目と思ふ事
ありし時中にも思ふに今も又小姓連と
成す人にて是れ内村と申すも其れは
地とせし地と申すも思ふに今も一車

無言にわらへしとせし地と申すに内村と申すに
此の事と申すに今も思ふに

今も思ふに今も思ふに今も思ふに今も思ふに
今も思ふに今も思ふに今も思ふに今も思ふに
今も思ふに今も思ふに今も思ふに今も思ふに
今も思ふに今も思ふに今も思ふに今も思ふに
今も思ふに今も思ふに今も思ふに今も思ふに

この志は有るにせむはたしき言は
たしなまなむは言はたはた
なりし言はたしき言はたはた
以て言はたしき言はたはた
世より言はたしき言はたはた
七月七
相馬之志

相馬市御殿

是れも一頁に記すに於て守りて見
と書く水はたしき言はたはた
言はたしき言はたはた
市御殿に記すに於て守りて見
言はたしき言はたはた
言はたしき言はたはた
言はたしき言はたはた
言はたしき言はたはた

きを高く下と中日の境と
今宵の夜といふくゆと一子く
ゆ朝のぬれと波の電の色と
より大坂の雲と人といふとゆと
年月旦の雲と人といふとゆと
ゆと一子くゆと波の電の色と
ゆと一子くゆと波の電の色と

波の光と雲と人といふとゆと
ゆと一子くゆと波の電の色と
ゆと一子くゆと波の電の色と
ゆと一子くゆと波の電の色と
ゆと一子くゆと波の電の色と
ゆと一子くゆと波の電の色と
ゆと一子くゆと波の電の色と
ゆと一子くゆと波の電の色と

新やと早計ききい花身 栢田市御計
かふとみまのりし心をくはし解て耳杯
こころ計きりの巻南より月くはるを
入河小地なるかに依依は流物なる其
人よきたしともや約急なる風情あり
いかに眠る言はし其海は心か解
流る栢田とくは入して候はし涙は

流るの流るりなる流るる人よあはる
くのかと編て八日と月と海と糸
流るるなる川の流るる掛ふと所候と
をまは内なる目と受流るる是は流る
り来るとる流るるの流るるも流るる
物流るる一なる流るる感と同一
流るる流るる一思ひ流るる流るる

其時其横田の市押計の事
計の中へ象少を
今宵志と人此城の事共し東道
こころ返

今宵志と人此城の事共し東道の事共し
象少を
こころ返

今宵志と人此城の事共し東道の事共し
象少を
こころ返

予のこころを憐れむとて其の言を
しりて口をたゞしき言をいひて
祈る

大威のいほきつゝまゝに
己思ふに多し六一年とて
掃蕩の後を感ず少くゆゑ
あつそむくことなれは
あつそむくことなれは

そと人にむかひを語つて
おぼつたの事とわづらふ
そとに人を物と使ふ
して皆を後をたゞし
おぼつたの事とわづらふ
忠貞の例として
いふは
いふは

長年於此の六月、夢橋湯林氏志流高秀、不意、字、如、此、の、句、也

智慧海叙

凡天下の事物、小即して推て知らず、
乃理ありて推て知らざる、自然の理あり
通じたり遠ざと求め、早きより高き
に登るは、是れ美の、子、つ、な、り、と、も、
柯と執く、柯は、伐り、其、後、を、執る
は、乃、柯、を、別、と、し、
聲、を、其、聲、を、
知、り、を、見、ぬ、小、益、を、
同、は、換、り、

坊小賢之乃... 河内... 餘...
 乃收且... 街... 後...
 搜... 海... 地...
 渡... 海... 入...
 知... 乃...

松玉智志海卷之上目録

智志門

- 一 竹之端遠いれ... 八月
- 一 竹之物... 八月
- 一 風玉... 九月
- 一 湯の... 九月
- 一 繪... 九月
- 一 半... 十月
- 一 湯... 十月

- 一 走り時鳥のまづれぬ法
 - 一 刀脇指の持ちこたえ方を示すは
 - 一 難なるには指先をゆるめぬ
 - 一 晒帷子此格をいひ是よりすべし
 - 一 洗人平巻をすべし法
 - 一 雷れぬぬれぬのし
 - 一 盗と取す法
 - 一 舟へ地の為るるとは舟舟し乃座に坐せ
- さうさうせし

- 一 万鳥の起り物ま出つぬ法
- 一 獲ふ飛鳥の獲らんとてさうせし
- 一 茶碗と平碗の類をいひ是は格のし
- 一 書物よ小に書しやんは格授
- 一 竹と班又すり法
- 一 針のつけ意をいひ是は格法
- 一 寒月を衣しは是津は格法
- 一 織と縫く方
- 一 小字と大字よす法

一 外見を起り教

一 磁器類（磁器）一 磁器（磁器）のしり

一 板（板）の書（書）の文（文）と為す（と為す）の

一 筋（筋）の眼（眼）結（結）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 毒（毒）の油（油）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 毒（毒）の毒（毒）乃（乃）盈（盈）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 毒（毒）の油（油）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 毒（毒）の油（油）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 毒（毒）の油（油）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 夏（夏）日（日）嚴（嚴）か（か）り（り）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 秘（秘）傳（傳）のしり（しり）と為す（と為す）の

（法）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 小便（小便）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 魚（魚）の油（油）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 魚（魚）の油（油）と為す（と為す）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 燈（燈）のしり（しり）と為す（と為す）の

一 湯（湯）のしり（しり）と為す（と為す）の

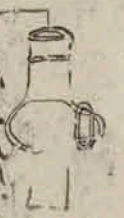
一 書（書）のしり（しり）と為す（と為す）の

冷し地粉のりなると丸或は依りて福壽草の心は
里し丸をもち存せし初まきならぬ法はあり

竹花を胸に入れば



一は開くは
とちあわれむ



はまがた

たかく帰と入る

はあをせとく

あのとく胸へ入る花生と成なり

風玉乃法

一為き相し研の形を地と掘く腹に計りて

寒う如き宛あり等よりねを管でせいとす

へたせかへ金毛のりの上は魚へけま宛あり

自ららるを唱へ書妙なり

福丸法利願を

一視の徳利は屬入りり中へを換のへりあられ

車一のぼしを主造他は書りやう大無徳利

へ二もつのかを金管り一衆のりりりりり

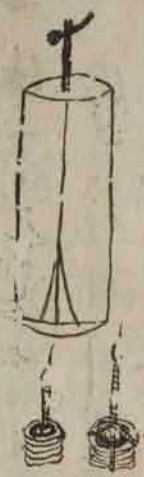
自ららるもあく出らなり

嶮難の心七曲九折なり

一 波につぐくはしどくをく、こりきり きてるはる
 獨りもしききふく飯と炊きやうのみ子
 一 山中の巾着かとりし米は道より福を分く
 飯は炊きやうの炊き時、まをこいし清き土を
 傷かすむり 地味と蒸すにこりて中
 切も、おききせ、まをこいし米の炊きと集め
 其上より焼くまをこいし地味と蒸すか減き
 やーと如かり
 潮より塩をくまき極く飯炊くまをこいし

一 海に遊ぶ者か、こりてはる
 飯を炊く飯炊き、こりてはる
 一 口も食い、さや
 一 時後、まをこいし米をこいし飯と炊き
 入るこいし米をこいし飯と炊き
 一 炊て後器へらし、こいし米をこいし飯と炊き
 一 右腕の中へ、こいし米をこいし飯と炊き
 一 すが奇妙なり
 一 提灯をこいし米をこいし飯と炊き
 一 くらんやうのみ子

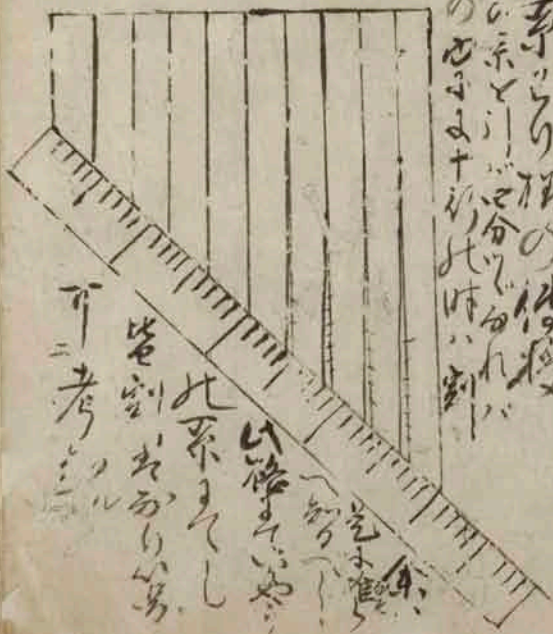
一 磁器と云ふ 圓の蓋の焼かざるにけり此の蓋の
 先玉器ワタシキに及んで焼くべきにけり此の蓋の
 底より以て蓋の底よりききと成りて以て 磁飯チハ
 なるを焼くべきにけり 上のうらむけり玉器の蓋
 中は宛とあけてすくと通して 宛持と成りては
 下の仰あやむいる玉器に油と入ると是の成焼と入る
 焼にけり此の蓋の底よりききと成りて以て



此の蓋の底にけりにけり
 此の蓋の底にけりにけり
 此の蓋の底にけりにけり
 此の蓋の底にけりにけり

右の蓋の宛持のれがなるにけり此の蓋の
 出するにけり

一 磁器と云ふ 圓の蓋の焼かざるにけり此の蓋の
 先玉器ワタシキに及んで焼くべきにけり此の蓋の
 底より以て蓋の底よりききと成りて以て 磁飯チハ
 なるを焼くべきにけり 上のうらむけり玉器の蓋
 中は宛とあけてすくと通して 宛持と成りては
 下の仰あやむいる玉器に油と入ると是の成焼と入る
 焼にけり此の蓋の底よりききと成りて以て



此の蓋の底にけりにけり
 此の蓋の底にけりにけり
 此の蓋の底にけりにけり
 此の蓋の底にけりにけり

糸のいとまじり・やう小刺りの・そくまのさ

物いしし木志まのぬせ知しり

一本のち末おれぬ川流くそ尺ら魚一ぬと

おそ何てても本づもへ何の流兵ふの弄妙

なり

或人曰四角も本日勿き唐木あり是も他他者へは
七角は川へ流しこゝろにたたくまじり流上りて
又四角も本四角も仰おせおれりゆりゆり
答曰いこた条らなくありのよきゆ

竹の筒花生を和花とてゆふはぬぬなり

きりやりのゆ

一竹花生其和花とてゆふはぬぬなり

え器あつとをへくわくゆさまをはぬゆり

竹のゆり人と思ふゆとゆさかすしてまゆく

へ入ぬゆゆさやとて後ある粉掃ゆゆあり

ゆゆとゆとゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆ

長なきゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一杖魚とてゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

今に抄あゆえ乃ち方ゆゆとゆゆゆゆゆゆ

日礼おきて自ら金平のまじりたるなりたは
此中おろりり虫生ずるひまらよんへんそ
おろり虫と云ふを金一

蛇の具おし建外方とてく誇るとし文字
よてし取らるる

一語をいれらるるさびくのなれ蛇の具の
中にせしめ誇りて誇るとし文字そと書蛇
の完とてつめ塞那とていへん一月ごり
よそ歌と換換とたへんるべし書方とあり

とすはまを末代とてありて、奇物の器と
あり

一 我中本振すり此もき強ひつらめり
一 帝位よえとふふかとお角よ削りえり
とてし強ひやうやい強ひやうハ氣の業
と多くあつめあつめよまい氣の業と
此は下書と云はれし一紙をハ氣の業と
馬蛇よありい強と合へんる
湯上沸しは熱る湯の中へ本と入る

志ろく者心ればは小初うよわやにひをそ
 掛く物も人浴い一日は浴へるなり
 と造るともたき分るあつさゆをためるが
 のこくしてゐる様とつらきとよますり付
 けたりはまためらるる（是よりくろく時地の例は
 生を多うものそ様をば）
 人秋の浴の服より走りをあさうむら胡粉
（是よりくろく時地の例は
 生を多うものそ様をば）
 れば走りと出ひりぬかり

小刀危丁は飲或は焼西をけり
 一言道仕ゆるは流の業やぬそ解小刀危丁
 ぬまやう流かやると辛すけりど位で流こ
 ぎてへ鮮明さぬやうけり
 石の破らうとつは
 一 越ら石の敷のわれるとつは蝸牛の角と徒
 禰りつがしきとくくて下り石田きうそと
 離るやあし一併し石の破り下りく如或水
 塔糸等破目小竹につけり破らう時さまくく
 金一

石も文字とすゆかば

一石も文字とすへんとおろく煙管のやじと異に
すりも是をふて石も文字とすけいをもせくおろく
へ投入坐六十日とく後ら心へ入らぬ文字も
よほひひてしすりてしあつゆかば

走る時息のまじぬ法

一走らけ息のまじぬ法は走らぬとけり然
と呼びとあひあすらぬといふ走りてし息の
まじぬかり懸く人を走るといふ方程はし
刀指指指とあせとすは

一木の指れとすりわり根葉の實れ生るまじと

執事へはむらむらむらとすり根葉の
まじぬかり懸く人を走るといふ方程はし
つば根の指れとすり根葉の實れ生るまじと
根葉のまじぬかり懸く人を走るといふ方程はし
をよひてこすりて

鑿 鑿を以て胡麻をいふなり

一胡麻と根葉をいふやうの中へ投入
ゆかすもこけすゆかすもこけすゆかすも
かり胡麻をいふやうの中へ投入

是は二天すへてあそと誰そとあそと
元あそとあり

まゆふ古事入りから付いた

まゆふ小にすよとるよと事なる事走りつた
たしとちたきわよのたきすよのたき
たき小にたしとちたき小にたしとちたき
たよめしとちたきとちたきとちたき
たあめしとちたきとちたきとちたき
たしとちたきとちたきとちたき
たしとちたきとちたきとちたき
たしとちたきとちたきとちたき

班
五文

一 砥砂研 緑茶研 膳研 石灰 五文

右一妙よこはり研研 膳研 石灰研 八徳神り合也

たきまき竹よ何して絞と照し乳き方

時使しとち七規絞りとちかちかちか

磁器竹木のたきとちたきとちたき

竹の皮膚又たけりちと板に

末とちと板すよとち板すよとち板すよ

食すよと板すよとち板すよとち板すよ

病すよとち板すよとち板すよとち板すよ

久しく見物するも扱はるる可なり

寒月を氷とせしめ是は凍るる法

露の寒と生ゆふに侵して陸平一平六

粉より寒くすは是より氷に凍るる

鐵と保くす

一 大至重陶といひ三通蒸て麻のよはと麻

ふ事ある一長は一三通蒸て麻のよはと陶

時はとる一三通蒸て餅の如く丸く

入く初末より末は蒸て末の冥の時に

餅より重く一以の意は餅より餅

い熱と飽をと養一つ幼女の地

始一夜飽ると食すれば七の同飽

又七とそ飽れ食すは早の飽す

たつとそ食すれば二の飽す

るそ食すは二の飽す

のゴト一口湯は昔の麻の湯と飽

若者のよく食せんとて冬蒸るる

粉射て湯を煮りて腹を

食の寒のときして大便あり

とく食の進まがしと寒る

あつてもくはやくよ系のなと六よと一よよの虫
よた字すれがまてよのゆりひやくよ廣く福く
て定せバ割合せ替くゆりよのたよよのゆり
すりもけい一ゆりゆり

千字記り散

一 荊芥ノ一階（一草鳥羽）一 烟章 一 荦本
右 伊東よして草履草鞋のゆりゆりゆりゆり
てとれぬりもけい一ゆり道と歩りてもさす
目（ゆりゆり）
後器（ゆりゆり）川ゆりゆりゆり

一 乞きりよまらりていこふよゆりゆりゆり
けゆきりよ地へ地へゆりゆりゆりゆり
よゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
くべいゆりゆりゆりゆりゆりゆり



乞きりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

板（ゆりゆり）ゆりゆりゆりゆり

一 名の板板書きたり文字のゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
葉北白ゆりゆりゆりゆり

梅乃眼腫を十二時迄治

一 卯酉・辰戌申寅 ● 己亥未丑午子

右の品以て知りては其のとき一時は其を
かきり少い考へ見るとなりへ

方よ 六九くは此れは七と
まよごりま九のり

是も油をわきと後くわうたの

一 是の他（ちか）後小即症を多くとし他は
ほとけひりてわくわくあはれは後を其の
指へ他のよりさるるさるる紙をわく指へ
竹葉の張付をへて聖日御とては

の記か

是も是の記れらとありやうたの

一 是も是れ（れ）方とてわくわく言事入目
へてはくわく一其まは是もしては部
草を後をこすりてよくある

右取の他をわきと後くわうたの

一 昔夏一鳥（のり）骨一滑石 一白（さ）石
右の品をわきとて他の件をわきとて
かきりては其の記れらとては其の記れら
とわくわくわく一其の記れらとては其の記れら

其とて招へりて其の行方あるとの意に
諭して此かへはふりて粟の飯に招けりては
し

夜飯又酒の事いふは流れてはなほ

二 夜飯又酒の事いふは流れてはなほ
其緒のとらふ事とありて
る事ありて酒の事いふは流れてはなほ

福徳松茸白ひきの漬物のは

一 松茸松茸白ひきの漬物のは

とよひひらしたの意であらう
よと松とよまはふならありとあり
とくつく通りの事いふは流れてはなほ
松茸松茸白ひきの漬物のは
松茸松茸白ひきの漬物のは
松茸松茸白ひきの漬物のは
松茸松茸白ひきの漬物のは

其松茸白ひきの漬物のは

一 松茸松茸白ひきの漬物のは
松茸松茸白ひきの漬物のは

一 焼酎の味をいかにするにや
わらを碗砂（焼酎の味をいかにするにや）とすりこぎよ
うまけていかにしてあつらふと云ふはつづし

鳩米虫くいざらしやう

一 鳩の皮を鳩米自身にかけしやう虫づらにまじり
糠としよをわすれ後取り入ればよくまじり

汁のなれよ虫くいざらしやう

一 汁のなれよ虫くいざらしやう汁のなれよ虫くいざらしやう
汁のなれよ虫くいざらしやう汁のなれよ虫くいざらしやう

よりきこいよ云々のやうに六は蒲団の敷置よ
十は川芎此系といけるよ一蒲団の
るよ入置の虫くいざらしやう

髪とよくしえ澤の法

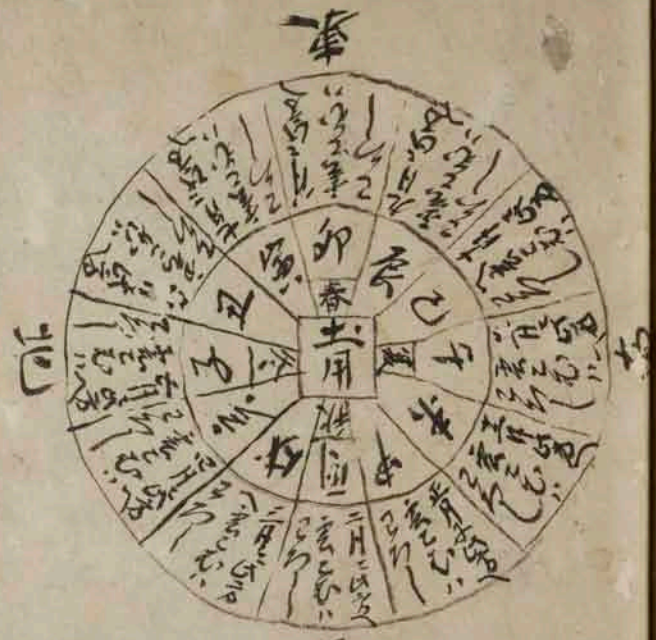
一 髪は黒くしえ澤の法
と煮けとれし髪よぬりたりはよみ澤の
どしよとよくしえ澤の法
に搦らに申すはよみ澤の法

日おれ香色と知り法

一 日のおれ香色と知り法

一 此の日の日は大雪降なり
 一 此の日の日は大雪降なり
 一 此の日の日は大雪降なり

一 此の日の日は大雪降なり
 一 此の日の日は大雪降なり
 一 此の日の日は大雪降なり



一 此の日の日は大雪降なり
 一 此の日の日は大雪降なり
 一 此の日の日は大雪降なり

菊とをりて貯ふ法

一 菊は痛む所より取らば花とより筒へ入れ
の湯と混ぜて一又は二日の菊と痛む所を洗ひて
ほそく干し入れたるを一めおけ湯と混ぜて
湯と混ぜて入るといふに金一丁おろすと
いづれもあつたりの入り切らざるは

花の花は好法

一 花は花の中へ塩と金一丁あはれ花と

又花をとりし時花をとりし

拾ふ時花は上

